瘠我慢の説

序

石河幹明

青空文庫

瘠我慢の説は、福沢先生が明治二十四年の冬頃に執筆せられ、これを勝安芳、榎本武揚の二氏に寄せてその意見を徴められしものなり。先生の本旨は、右二氏の進退に関し多年来心に釈然たらざるものを記して輿論に質すため、時節を見計らい世に公にするの考なりしも、爾来今日に至るまで深く筐底に秘して人に示さざりしに、世間には往々これを伝うるものありと見え、現に客冬刊行の或る雑誌にも掲載したるよし（栗本鋤雲翁は自から旧幕の遺臣を以て居り、終始その節を変ぜざりし人にして、福沢先生と相識れり。つねに勝氏の行為に不平を懐き、先生と会談の語次、ほとんどその事に及ばざることなかりしという。この篇の稿成るや、先生一本を写し、これを懐にして翁を本所の宅に訪いしに、翁は老病の余、視力も衰え物を視るにすこぶる困難の様子なりしかば、先生はかくかくの趣意にて一篇の文を草したるが、当分は世に公にせざる考にて人に示さず、これを示すはただ貴君と木村芥舟翁とのみとて、その大意を語られしに、翁は非常に喜び、善くも書かれたり、ゆるゆる熟読したきにつき暫時拝借を請うとありければ、その稿本を翁の許に留めて帰られしという。木村氏といい栗本氏といい、固よりこれを他人に示すがごとき人に非ず。而して先生は二人の外何人にも示さざれば決して他に漏るるはずなきに、往々これを伝写して本論は栗本氏等の間に伝えられたるものなりなどの説あるを見れば、或は翁の死後に至りその家より出でたるものにてもあらんか）。

依て思うに、この論文はあえて世人に示すを憚かるべきものにあらず、殊にすでに世間に伝

わりて転々伝写の間には多少字句の誤なきを期せざれば寧ろその本文を公にするに若かざるべしとて、これを先生に乞うて時事新報の紙上に掲載することとなし、なお先生がこの文を勝、榎本二氏に与えたる後、明治二十五年の二月、更らに二氏の答書を促したる手簡ならびに二氏のこれに答えたる返書を後に附記して、読者の参考に供す。

明治三十四年一月一日

石河幹明　記

青空文庫情報

底本：「明治十年丁丑公論・瘠我慢の説」講談社学術文庫、講談社
1985（昭和60）年3月10日第1刷発行
1998（平成10）年2月20日第10刷発行
底本の親本：「明治十年丁丑公論・瘠我慢の説」時事新報社
1901（明治34）年5月2日発行
初出：「明治十年丁丑公論・瘠我慢の説」時事新報社
1901（明治34）年5月2日発行
※副題の「序」は、このファイル作成時に付けたものです。
入力：kazuishi
校正：田中哲郎
2006年11月7日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

瘠我慢の説

序

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　石河幹明
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/